

## ◆企画名：

-教室を飛び出し、互いのことば・文化について学ぼう-  
「三条会商店街散策ツアー」

## ◆企画団体名（個人の場合は個人名）

：すきやねんにほんご

## ◆実施日・実施場所：

2024年10月28日（月曜日）

京都市中京区三条会商店街



## ●活動の概要

事前学習として、千本通の入り口にあるスギドラッグの前付近でレジメを配布し、三条会商店街の特徴や歴史についてクイズを行い、それに答えてもらいながら基礎知識を学びました。レジメの中には代表的なお店の写真が載せられていてそれを探しながら散歩をスタートしました。お店の写真があったことで、皆興味を持ちながら、集中して歩くことができました。日本人のメンバーは、日本に特徴的なものを紹介しました。留学生は、読み方がわからない漢字を聞いて確認したりしました。

ある参加者は沖縄料理の店にルーロー飯があることに驚いていました。イベント係は、商店街の中に「かさ屋」や「バッグ屋」「ぼうし屋」など、現在では珍しい一つの商品を専門に扱う商店があることを紹介しました。お寺の前には、掲示板に「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉が書かれており、それも日本文化の一つであることを紹介し、その言葉の意味についても説明しました。八坂神社に関係が深い神社についての説明もしました。後日、ミーティングを行いイベントの振り返りをしました。

## ●双方向の異文化交流のために工夫したこと

事前にイベント係を中心に4名が下見に出かけ、2名でレジメを作成しました。三条会商店街が地域に根ざした商店街であり、アーケードがある京都で一番長い商店街であることを中心に、商店街にあるお店や神社、銭湯などについてまとめました。異文化の活動となるように、注目して欲しいお店の写真を13個レジメに配置し、歩いて見つけたものには○(まる)を書くように指示しました。活動の初めに、レジメで三条会商店街についてのクイズを皆にやってもらい、基礎知識を学びました。散策の途中、イベント係はお店の説明をおこない、参加者は漢字の読み方を確認したり、不明な点を質問したりしました。

## ●企画参加者からのアンケート結果

「このイベントの満足度」について、9割の参加者がとても満足したと回答しています。異文化交流ができたかという設問には7割が大いにできた、2割が満足できたと回答しています。どんな異文化交流ができたかについては次のような回答がありました。

「日本人学生と話せました。それから話しながら日本の特徴ある店舗をたくさん楽しく見ました」

「京都で一番長い商店街である三条会商店街の歴史を学びました。帽子屋や漬物屋さんなどの店を見つけました。神社

の文化についても学びました。日本のお寺は門前にことわざ、格言などを書いていて興味深かったです」

「普段は引っ込み思案であまり積極的に人に話しかけないが、異文化交流を機にたくさんアウトプットやインプットができてよかったです。テーマがあって、実物も見ながら、話のネタに困らなくて最高に楽しかったです。何よりも優しくて温かい人たちに囲まれて、久々にちゃんと生きているように感じました」

新しく気づいたこと・学んだことについては次のような回答がありました。

「様々なお店がある商店街を、いろいろな国の人と一緒に歩くことで、互いの文化の違いとともに、普遍的に変わらない文化もあるということを知りました」

「やはりレベルの高い学習者でも、日本の伝統的なものに接する機会があまりないので、漢字の読み方とか文化的背景とかお寺の掟とかは知らなかった。今回は実際の体験を通してお互い勉強になり、よかったと思う」

「京都に長く住んでいるので、三条会商店街のことは知っていて何回か来たことはありましたが、留学生や他府県出身の人とゆっくり歩き、いろいろな質問に答えることで、今まで知らなかった商店街の魅力に気づくことができました。また、他府県や他の国の文化についても知ることができ、大変貴重な経験でした」

#### ●企画実施を通して学んだこと・今後に生かしていきたいこと

アンケートにもあるように、実際に三条会商店街を歩き、実物を見ながら説明を聞いたり、質問したりできたので、生きた学びの活動となったと思います。また、いっしょに活動することで信頼関係も深まり、お互いの文化の違いに気付き、多くのことを知る機会になりました。そのことは、アンケートで 9 割の参加者が満足し、異文化交流がよくできたと答えていることから窺えます。実際に京都の商店街を歩くことで、ふだんの教室では得られない異文化交流の体験ができました。

今回のイベントを実施し、アンケートを取り振り返ることで、いろいろな新しい着眼点を得ることができました。「イベントの実施にあたっては、リマインドを SNS を使っておこなうこと」、「紹介や説明をもっと充実させること」、「人数が増えた場合のグループ活動を考えておくこと」、「参加者からの質問がたくさん出、さらに交流が促進されるような工夫が重要であること」などです。

## ◆企画名：

-教室を飛び出し、互いのことば・文化について  
学ぼう- 琵琶湖周辺散策ツアー

## ◆企画団体名（個人の場合は個人名）：

すきやねんにほんご

## ◆実施日・実施場所：

2024年12月22日

石山寺、三井寺



## ●活動の概要

午前中に石山寺を訪れ、源氏物語との関連について学びました。その後、昼食を取りながら、地元の特産品や、食文化について話しました。午後には三井寺に向かい、そこでの歴史や文化についての説明を受けながら参拝しました。参加者は、日本の寺院や歴史、文化について意見を交換しながら、互いの文化について理解を深めました。

## ●双方向の異文化交流のために工夫したこと

石山寺と三井寺という日本の歴史的・文化的に重要な場所を選び、参加者が歴史や文化について、深く考えられるよう工夫しました。参加者には、あらかじめ日本と中国の歴史、文化（文学）に関してまとめた資料を配付し、中国の文化（文学）が、日本の文化（文学）に大きな影響を与えていることについて説明しました。主な内容は以下の通りです。

## 1 石山寺について

紫式部が源氏物語の着想を得た場所と言われているので、源氏物語と「長恨歌」の関係について学びました。また、紫式部と藤原道長を主な登場人物とした大河ドラマ「光る君へ」に因んだ特別展示を見ながら、日本の文化や歴史について学びました。

## 2 三井寺について

6年間、唐で修業した円珍が宗祖であり、唐の時代における日本と中国の関係などに関する展示を見ながら、互いの文化の共通点や差異について交流する機会を持ちました（展示されていた仏教に関する漢文は、中国でも知られているもので、その意味について中国の留学生から解説してもらった場面もありました）。

周辺は大津京があった場所なので、栄えていた大津京が減ってしまったことに思いをはせる和歌「近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古（いにしへ）思ほゆ」と、栄えていた長安の都が減ってしまったことに思いをはせる漢詩「春望」（国破れて山河があり・・・）の関係を、三井寺の展望台から大津京跡方面を見下ろしながら説明しました。また、「春望」に関連して、松尾芭蕉の「夏草や兵どもが夢の跡」も紹介し、自然の悠久と戦乱のむなしさなどについて考えることができるよう工夫しました。さらに、配布資料には、この句から広島原爆について考える文章を載せることによって、普遍的問題として「戦乱（戦争）のむなしさ」について考えられるよう工夫しました。

また、昼食時には日本の食文化について紹介し合い、参加者同士が互いの食文化を比較し、異なる文化的背景に対する理解を深めました。自由時間中には、参加者が互いに質問したり、自分たちの国の文化について話したりすることで、日常的な文化の違いについて自然に学び合いました。一方的な学びではなく、積極的な意見交換を促進するために、参加者が自分の考えを自由に表現できる環境を整えました。また、日本語と中国語を交えての交流を行い、言語を超えたコミュニケーションを試みました。これにより、参加者が言語の違いを感じながらも、心の交流を深めることができました。

### ●企画参加者からのアンケート結果

「源氏物語や紫式部など、日本の文学に関する知識を得るとともに、日本文化における中国文化の影響についても知ることができた」という声が多くありました。他に、「日本の寺院に対する理解が深まった」、「日本と中国の文化における共通点や違いを話し合うことができて良かった」「異文化交流の機会がとても有意義だった」といった感想がありました。

これらの感想から、日本の寺院や歴史に関する知識を深め、他国の学生と意見を交換できたことが、良い異文化交流の機会になったと感じていることが窺えました。

### ●企画実施を通して学んだこと・今後に生かしていきたいこと

今回の活動を通して、異文化を理解する際、参加者が実際に体験を通じて学ぶことがいかに重要であるかを再認識しました。特に、文化的な違いを感じながらも共通の話題を見つけて交流することで、より深い理解が得られることを実感しました。参加者は、お互いに異なる視点を持ちながらも共通点を見出し、友情を深めることができました。このように、文化的背景の異なる参加者が共に学び合い、交流を深める活動を通じて培った「多文化共生への態度・姿勢」は、参加したすべての人にとって、今後の生き方・在り方に大いに活かすことができると確信しています。



◆企画名：-教室を飛び出し、互いのことば・文化について学ぼう-  
「中国語講座(国際交流)」

◆企画団体名（個人の場合は個人名）：  
すきやねんにほんご

◆実施日・実施場所：  
2025年1月17日金曜日  
京都府立鴨沂高等学校



### ●活動の概要：

京都府立鴨沂高等学校において、3年生の京都文化コースの生徒（10名）対象に実施しました。中国語講座や交流活動を通して、「多文化共生社会」の実現に向けたグローバルなものの見方や考え方を身に付けることを目標とし、事前・事後学習も実施しました。交流当日は、中国語講座、中国と日本の文化（文学）の講義を実施した後、「文化」や「社会の在り方」についての話し合いを行いました。

#### ・具体的に実施した内容（概要説明後）

- ①中国人留学生自己紹介（6人） ※出身地・中国の文化の紹介など
- ②高校生による取組紹介（高校生作成「京都御苑案内コンテンツ」紹介）
- ③留学生による「中国語講座」・「文化・文学に関する講義」
- ④「多文化共生社会」の実現に向けて（グループ）
- ⑤各班高校生代表交流内容発表

#### ⑥まとめ

#### ・グループワークテーマ

「多文化共生社会を実現するために私たちに何ができるか」（国際交流を通して考える）

#### 1 課題

・人々の多様な在り方を相互に認め合える共生社会の実現⇒持続可能な社会の構築（SDGs）

#### 2 課題解決の方向

・自文化や他の国の文化を学ぶことにより様々な課題を明らかにするとともに、その課題解決の方策について考える。

（キーワード…共生社会、多様性の尊重、他者との協働、持続可能な社会等）

#### 3 「多文化共生社会」を実現するために私たちに何ができるか考える。

### ●双方向の異文化交流のために工夫したこと

事前に、当日の講座内容や、広報の内容について考える機会を持ちました。高校生にはあらかじめ、中国語講座、中国と日本の文化（文学）の関係についての講義、「多文化共生社会」の実現に向けた交流活動を行う旨、担当教員を通して伝えてもらいました。また、あらかじめ文化の捉え方、中国と日本の文化（文学）、多文化共生社会などについて調べておくよう指示してもらいました。また、質問事項についても、あらかじめ双方で共有しました。

中国語講座では、基本的なコミュニケーションに必要な表現や、増加する中国人観光客などへの対応に必要な表現について、中国人留学生が具体的な会話場面を想定したシナリオを考え、生徒の前で会話場面を再現できるよう準備しました。また、漢詩や、中国文学と日本文学の関係などについても、わかりやすく説明できるよう工夫しました。

### ●企画参加者からのアンケート結果

アンケート結果から、大変有意義な講座、交流ができたことが分かりました。結果は次の通りです。

#### 1、自他の文化（社会）の魅力、課題について

「中国は土地が広いので、春節などの特別な日に行くことも地域によって異なっていたのがおもしろいなと思った。地域の方言なども多くの種類があり、奥が深いなあと感じた」

「やはり中国は広いので質問しても一概に『中国では～』と言えないのが地域性が出て面白いなと思いました。中国での正月のお話を聞いてやはり日本とは違うなと思いました。お年玉の概念があるのは驚きでした」

「中国についてあまり知らなかったし、中国の人と話す機会もなかったので、この機会を通して新たに知ることが多くありました」

「中国の人からみて、日本のことの『リアル』を聞いておもしろかったです。人柄などもぜんぜんちがって、すぐフレンドリーでたくさんお話をしてくださって楽しかったです」

「中国語の挨拶が『御飯食べたか』ということであったり、自己紹介の料理の写真を見たりして、中国の方は（みんなで）ご飯を食べることを大事にされているのかなと感じました。質問で『日本の中華料理と中国料理の本場の味の違い』を聞いた時に、中国には『中華料理』はない、『天津飯』は日本で初めて食べたこと等にびっくりしました。中華料理は中国！というイメージが強かったけど見方が変わりました」

「ときどき留学生からでる関西弁が新鮮でした」

#### 2、「多文化共生社会」を実現するために私たちにできること、大切なことは何かについて

「互いの国の文化についてもっと知ることが大切だなと思った」

「お互いに関心を持って相手の国の文化や思想を学び、理解することが多文化共生社会を実現するために必要だと思う」

「お互いのことについて先入観や上辺のことだけを知るのはなくて、実際に話し合ったり、行ってみたり、よく知ることが互いの理解を深めるのにすごく大事なのだと学びました」

「今の私たちにできることは、学んだこと、感想などを自分の中でとどめておきだけでなく家族、友達などに発信していくことで少しでも『多文化共生社会』の実現につながると考えました」

「互いを知って分かってから言いたいことを言う。まずは知ることから」

「『多文化共生社会』を実現するために、交流する機会はとても貴重だと思います。そしてこれを一回で終わらせるのではなく継続させてお互いの文化をより深く学ぶことが大切だと思います」

#### 3、高校生から留学生の方へのメッセージ

「すごく皆さん物腰が柔らかくて、日本語もすごく丁寧でした。正直、自分の周りの日本人より礼儀正しくて尊敬します。中国の文化をたくさん知ることができ良かったです」

「中国の方々とお話しできる機会はなかなかないので、とても貴重な体験になりました。日本語が皆さんお上手で、とても驚きました。中国の様々な文化について知ることができて勉強になりました」

「新たに学ぶことが多くあったので、このような文化交流ができて良かったです。ありがとうございました。楽しい交流でした」

「実際に中国の方とお話したのは初めてで、中国の文化や食事、言語などを知ることができる貴重な経験をありがとうございました」

「中国の文化について詳しく教えてくださいありがとうございました」

「自分の知らないことばかりで知識が増えたとし中国についてもっと色々なことを知りたいと思いました」

#### 4、留学生のメッセージ・感想等

「日本の高校生といろいろ話し合うことができ、文化交流ができて良い思い出になりました。大変勉強になりました。」

「今回の異文化交流は、視野を広げ、異なる価値観や習慣を理解する貴重な経験でした。相互理解を深めることで、自己成長にも繋がることになると思います」「中国のことについて、日本のことをどう思ってるかなどいろいろ質問されて話が盛り上がり楽しかったです」

「日本の高校生との交流を通して、自分の高校時代のことを思い出した。異文化の交流にも新しい知見をもらいました。」

「京都御苑について知りました。特に巨大な木が印象的でした。」

「日本の高校生と交流する機会がなかなかないので、今回の機会はすごく大切だと思います。今回の交流活動を通して、今の日本の若者の中に流行っていることがわかりました。」

「日本の高校生と交流できて、嬉しかったです。わからないこともたくさん教えてくれて、楽しい時間を過ごしました。」

・参加者のアンケートから、「中国語講座」の内容が大変有意義であったことが窺えました。簡単な挨拶にとどまらず、町で出会った中国人が困っているときにどのように対応したらよいかなどについても、具体的に中国語会話例で示すことができたからです。また、中国語における定型挨拶に「ご飯食べたか」という表現があること、その表現はマレーシアなどにもあることなどについて知ることによって、食事がそれぞれの文化においてどのような意味を持っているのか、文化の伝わり方とその背景等、文化や言葉に関するディスカッションが活発に行われ、文化的背景の異なる参加者が共に学び合い、交流を深めることができ、異文化交流の目的は達成されたと考えています。さらに、漢詩を、中国の様々な方言で読むことによって、押韻の発音の違い（日本語の音読みだけではわからない押韻の奥深さ、母音、子音レベルで見ると、南の方言のほうが、より唐の時代の韻の名残があること）などについて学ぶことができました。

#### ●企画実施を通して学んだこと・今後に生かしていきたいこと

今回の活動を通して、異なる文化背景を持つ者同士が対面で話し合うことがいかに大切であるかということを再認識しました。自文化や他の国の文化の魅力や課題について交流した上で、様々な課題を明らかにするとともに、「多文化共生社会」の実現に向けた課題解決の方策について考える機会を持つことによって、お互いの力で異文化理解・異文化交流を促進しようとする気持ちを喚起することができました。持続可能な社会の構築（SDGs）が、喫緊の課題とされる現代社会において、人々の多様な在り方を相互に認め合う、このような交流の機会を持つことは大変有意義であったと思います。

しかし、「文化交流ということなので、私たち留学生の話だけじゃなくて、日本人生徒の話も聞きたかった」という留学生の意見もあり、高校生が中国のことについて尋ねる時間が長く、双方向での交流が不十分であったグループもありました。今後、このような交流を行う際、時間配分等工夫する必要があると考えています。

この活動を通じて、得た知識や身に付けた「多文化共生への態度・姿勢」は、参加したすべての人の在り方・生き方に活かされるにとどまらず、「誰一人取り残さない持続可能な社会」の実現に活かされると確信しています。このように、日本人高校生と留学生が協力し、互いの文化に対する理解を深められたことは、この企画の大きな成果であると考えます。



◆企画名：-教室を飛び出し、互いのことば・文化について学ぼう-「関西弁講座」

◆企画団体名（個人の場合は個人名）：  
すきやねんにほんご

◆実施日・実施場所：  
2024年10月2日～2025年1月15日  
立命館大学 BBP



### ●活動の概要

2024年10月2日～2025年1月15日の間、水曜日の昼休みに立命館大学 BBP において実施しました。「すきやねんにほんご」のメンバーで関西出身の者が中心になり、国際交流基金 HP 資料「方言（関西弁）に触れる」や、書籍「聞いておぼえる関西（大阪）弁入門」（真田信治著 ひつじ書房）などを用いて、関西弁の語彙や表現の特徴、共通語との違いなどについての講義や交流を行いました。

### ・具体的に実施した内容

#### ①国際交流基金 HP 資料「方言（関西弁）に触れる」

（アクセントの違い「橋・箸」、否定の「～ちゃう」・「～へん」、表現の違い「おおきに」・「ほんま」など）

・2 回目以降は、主に「聞いておぼえる関西（大阪）弁入門」（真田信治著 ひつじ書房）を用いて、各回テーマを設定し実施しました。

#### ②・尊敬の表現「～はる」「よまはる（京都弁）」「よみはる（大阪弁）」など

・区役所、病院などでの会話、お店でのやりとりについて

#### ③・動詞の否定形「～へん」

「よまへん」「よめへん」など

#### ④・義務・必要の表現「～なあかん」「～んとあかん」「よまなあかん」「よまんとあかん」など

・関西弁、共通語のアクセント

#### ⑤・依頼の表現「～てや」「～って」「～とって」「～たって」など

・関西弁で、食べ物をどのようにいうか。「おばんざい」「～のたいたん」「おじや」「ばらずし」・・・

#### ⑥・命令の表現「動詞のます形+な」

例「食べな（禁止の命令）」「～や」など

・関西弁の地域ごとの違い・二府四県の特徴・エリアごとの特徴、日常生活でよく使う関西弁

#### ⑦・可能否定の表現「よう～へん」など、一拍語を二拍語で読む 例「蚊（カア）」仮定・推量の表現「～や」など

（イ形容詞のイ抜け 例「こわい」→「こわ」）

#### ⑧・「京都人に学ぶ コミュニケーションの極意」

☆表面的な意味と、真意について

「考えときますわ」「行けたら行くわ」

「しょうもないもんですけど」

「つまらないもんですけど」

「ぶぶ漬け（お茶漬け）でもどないですか」

「お茶（お水）どうですか」

発言の最後の「知らんけど」など

#### ☆関西弁によるコミュニケーションの在り方について

高コンテキストな会話（相手を立てながら、やんわりと自分の主張を通したり、相手の間違いを気づかせたりする「会話術」）  
「異文化理解論」、「語用論」、「アサーション（非攻撃的自己主張）」等の視点から考える。

#### ●双方向の異文化交流のために工夫したこと

関西弁話者が「関西弁」の基本的な意味、使い方などを示すだけでなく、学習者から日ごろ関西弁で困っていること、疑問に思っていることなどについて発言してもらい、その疑問等に応える機会を多く持ちました。学習者それぞれのニーズに応じた形で、生活言語としての関西弁への理解が深まるよう工夫しました。

たとえば、日常生活（バイト先など）でも役に立つ表現の会話練習を取り入れたり、関西弁（特に京都弁）によるコミュニケーションの在り方について、日本語母語話者と留学生で話し合う機会を持つたりすることで、円滑に人間関係を築くために、どのような言葉遣いをするべきかということについて考えました。

また、病院や区役所などでコミュニケーションがうまくいかず困った時の対処法について具体的に助言するなどの工夫をしました。

#### ●企画参加者からのアンケート結果

「身近に聞く言葉を学べてためになりました。さらに学びたい気持ちになりました」

「具体的内容で日常生活（バイト先など）でも役に立つ内容だった」

「疑問がないぐらい説明が詳しかった」

「みんなの意見を聞くのはおもしろいと思った」

「日本人でしたが、関西弁ネイティブではなかったので、とても勉強になりました。関西弁を通して、関西人の友達との話題ができた、留学生と話すこともできたりして楽しかったです。これからも関西弁について色々知りたいと思っています」

「私は関東出身で大学から京都に来たので、大学生活を送るなかで関西の言語文化について疑問を覚えることがしばしばありました。講座で紹介された「～はる」や「～へん」もそうでした。これらは頻繁に使用されるにも関わらずニュアンスがつかみにくかったので、理論的に例を挙げながら説明してもらったおかげでかなり理解が深まりました。さらに、文法や意味役割を理解することで、その背景にある関西人（京都人）の思想やコミュニケーションの戦略にも気づくことができました。同じ日本人でも、地域や環境が違うだけで言語や思想において異なる要素があるというのがとても面白かったです」

このような感想から、「関西弁講座」の内容が日常生活においてとても役に立っていることが分かりました。また、関西弁を用いた近隣の人や友人との交流を促すこともできたと思います。さらに、方言が持つ奥深い意味について、参加者、主催者双方が改めて考える機会にもなりました。

#### ●企画実施を通して学んだこと・今後にかかしてきたいこと

関西弁（特に京都弁）によるコミュニケーションの在り方や、関西弁（主に京都弁）がどのような意味を持っているのかなどについて、日本語母語話者と留学生で話し合う機会を持つことで、円滑に人間関係を築くために、どのような言葉遣いをすれば良いのかということについて参加者全員で考えることができました。また、日本における方言の違いや意味について考えるだけでなく、留学生の母語における方言の違いや意味についても考える機会を持つことによって、国内外の異文化理解・交流を促進することができました。